

山月記

第一段落

隴西の李徴

博学才穎

性格：狷介・自ら恃むところす

こぶる厚い

天宝の末年

・進士試験に合格

・江南尉に補せられる

賤吏に甘んずるを潔しと
しない

いくばくもなく

・官を退く

・故山に帰臥し、詩作にふける

第一段落

・文名は容易に揚がらない

・生活は苦しくなる

焦燥
絶望

数年の後

・一地方官吏の職を奉ずる

|| かつての同輩の下命を拝する

=

自尊心を傷つける

抑え難い狂悖の性

↓ 発狂

一年の後

・二度と戻ってこなかった

第二段落

翌年

陳郡の袁傜Ⅱ監察御史

- 李徴と同年に進士に合格

- 李徴にとって最も親しい友

- 性格…温和

(↓李徴と衝突しなかった)

朝の暗いうちに出発

↓馭吏の言葉（人食い虎の件）
を退ける

←
「理由」 供回りが多勢
であつた

第二段落

← 一匹の猛虎の出現

※「あぶないところだっ

た。」

=

← 人間の声 〓 李徴の声

久闊を叙する

※李徴が叢から出てこない理由

- ・異類の身（〓あさましい姿）
を故人の前にさらせない

- ・袁傔に畏怖嫌厭の情を起こさせる

〓超自然の怪異



素直に受け入れる

第三段落

今から一年ほど前

汝水のほとり

← 戸外で誰かが呼ぶ

← 声を追うて走り出す

← 気がつく→と虎となっていた

← 夢かと思った↓夢でない

← 茫然・懼れた

理由も分からずに生きていく↓

生きもののさだめ（不条理な運命）

←

第三段落

← 死を想う

← 一匹の兎

← 自分の中の人間は姿を消す

← (虎としての最初の経験)

語るに忍びない所行をし続ける

人間の心

(一日のうち数時間)

↓ しだいに短くなっていく

情けなく、恐ろしく、

＝ 憤ろしい



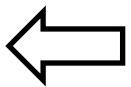
第三段落

どうして虎などに
なったか
←
どうして以前、人間
だったのか

すっかり消えてしまおうのではない
~~~~~  
いか

しあわせ

このうえなく恐ろしい



この気持ちは誰にも分からない  
(孤独感・絶望感)

## 第四段落

### 李徴の頼み

今も記誦している詩を伝録してほしい

↓一部なりとも後代に伝えないでは、死んでも死にきれない（＝悲痛な執念）

（袁傖の感想）

・格調高雅・意趣卓逸

・非凡な才



第一流の作品となるのには、どこか（非常に微妙な点において）欠けるところがある

## 第四段落



自嘲

↓あさましい身

お笑い草ついで↓即席の詩

## 第五段落

なぜこんな運命になったか

（李徴の考え）

（人々） 倨傲 尊大

努めて人と交わりを  
避ける

（内心） ほとんど羞恥心に  
近いもの

- 師に就かない
- 詩友と交わって切磋琢磨しない
- 俗物の間に伍すること  
もしない

## 第五段落

（分析）

臆病な自尊心

尊大な羞恥心

猛獣（虎）

・妻子を苦しめ、友人を  
傷つける

・才能の空費

卑怯な危惧

刻苦を厭う怠惰

（憤悶と慙恚）飼いふとらせる

外形を内心にふさわしいものに  
変えてしまった（Ⅱ虎の姿）

## 第五段落

← 胸を灼かれるような悔い・悲しみ

← ↓ 誰かに訴えたい

誰一人おれの気持ちを分かって  
くれる者はない

Ⅱ 孤独感の悲痛な訴え

## 第六段落

### 李徴のもう一つの頼み

(＝妻子のこと)

・妻子に自分は既に死んだと告  
げてほしい

＝

今日のことは明かさな  
い  
でほしい



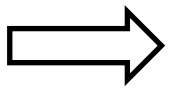
- ・これ以上妻子を苦しめ  
たくない
- ・人間としての尊厳を保  
ちたい

・道塗に飢凍することのないよ  
うに計らってほしい



## 第六段落

(自嘲)



本当は、まず、このことのほう  
を先にお願ひすべきだったのだ

=

人間~~~~~だったなら

|| 他人を愛し守れる存在

※ 帰りにはこの途を通らないで  
ほしい

|| 故人を認めずに襲いか  
かるかもしれない

|| 「今の姿をもう一度お目につけ  
よう」

|| 自分に会おうとの気持ち起  
こさせないため

## 第七段落

堪え得ざるがごとき悲泣の声

・袁傜との永遠の別れ

・人間の世界との永遠の別れ

再びその姿を見なかった



主語…袁傜

### 効果

・虎となった李徴の孤独な姿が  
印象づけられる

・虎になった人間の存在を暗示

|| 不気味さ